AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 () 平成20年度:7.

日本語版TRIGからみた遺族の悲嘆反応と医療職へ抱くgrief careの希望

小倉, 笑子 ; 小林, 和子 ; 小澤, 和永 ; 望月, 吉勝

日本語版 TRIG からみた遺族の悲嘆反応と医療職へ抱く grief care の希望

8階東ナースステーション　○小倉　笑子、小林　和子、小澤　和永、望月　吉勝

【緒言】

遺族となって半年から1年間の継続した働きかけの必要性は疫学研究で明らかにされており、中でも看護師だからこそできるケアのあり方について、遺族の悲嘆も尺度を使用し包括調査した。

【方法】

電話連絡にて同意を得られた10例に対して、同意書と自記式質問紙を配布し郵送法によって回収した。日本語版 TRIG のスコア（以下 TRIG とする）により悲嘆反応を確認し、介入希望の有無で分け、比較した。自由記述については内容を抽出し、カテゴリー化をはかった。

【結果】

女性8人、男性2人、平均年齢は54.3歳。全例とも家族外来を利用したことがない。家族会参加希望は4例であった。家族会の内容希望としてカウンセリング5例、音楽療法・家族間交流2例であった。介入希望として、退院時にパンフレット提供5例、半年後病院に来てもらいお話する2例、慰問カードや電話訪問の希望はなかった。家族外来を希望しなくても介入の希望は7例であった。TRIG では Spearman の順位相関係数＝ 0.699 (P =0.024) であり、中程度の強さがみられた。

【考察】

遺族からの訴えがない場合であっても悲嘆状況が強いケースもあり、経過期間1年を過ぎるまでは遺族の個別性に基づき、パンフレット提供、カード送付、電話訪問、追悼会などを検討し医療者からの働きかけ、家族間の交流も配慮していく必要がある。課題として悲嘆の強い家族のスクリーニングの手段、時期や介入手段の検討・実践・評価がある。